

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：53601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02522

研究課題名（和文）墓地および地所の空間所有の権利に関する研究 ホーソンの晩年の作品を中心に

研究課題名（英文）The study of ownership for space, real estate, and grave site in Nathaniel Hawthorne's late works

研究代表者

小宮山 真美子 (KOMIYAMA, Mamiko)

長野工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：30439509

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀アメリカ人作家ナサニエル・ホーソン(1804-64)の晩年の未完の作品を中心に、墓地を含めた土地空間の所有の問題、および死者の埋葬を中心とした弔意儀礼が持つ意味について考察することを目的とし、分析および検証を行った。土地空間を獲得する行為と死者を埋葬する行為が、共同体の成り立ちとアメリカ国家の記憶に結びついていることから、初期の短編小説も研究対象に加えた。その結果、晩年の作品には祖国イギリスと新大陸アメリカの時空間を横断する課題が色濃く反映されていることが浮き彫りになった。これらの考察を国内外の学会で研究発表を行い、論文にまとめて成果とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ国家は、イギリスからの移民がアメリカ人として共同体を築くために獲得した土地、および未来に繋ぐための地所を子孫が相続することで、その土地空間を広げてきた。その言説の下支えとなったのが、死者の埋葬の儀式を含む追悼の社会システムである。ホーソンのテクストをひとつの証言として歴史的パースペクティブに置き、初期作品から晩年の未完の作品を、私的な物語空間から公的な記憶空間へと読み替えた。それらを21世紀現在の視点から眺めたときに出現した「繰り返し語る」という特性は、アメリカの民主主義像に対する再考と理解の深化に寄与するという点で、学術的・社会的にも重要な意義を持つと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to investigate the function and the meaning of "burial" and the issue of possession of land not only in the fictional/private sphere, but also the real public/national space including burial ground through Nathaniel Hawthorne's unaccomplished works. Since the process of mourning and funeral rites are deeply related to the birth of this Nation, I added Hawthorne's early tales to my research subjects in order to compare them with his late works. Considering the fact that Hawthorne had treated New England past as his source material, his narratives always retell another version of history in the fictional form. Thus, his "twice-told" style connect the past to the present across the borders of historical time as well as narrative space. As a result of these studies, I gave presentations both in Japan and at International conferences, and then reflected the feedback into academic papers.

研究分野：アメリカ文学・文化

キーワード：ナサニエル・ホーソン 慰撫と弔意儀礼 埋葬と衛生問題 ダゲレオタイプの写真術 カルトグラフィ
ー 領土拡張主義 大西洋横断的視点 Claimant Narratives

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

19世紀アメリカ人作家ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne: 1804-64)は、『緋文字』(1850)の大ヒットによりアメリカン・ルネッサンス期を代表する作家となった。1864年に死去するまで晩年の10年の間も6つの断片的な作品が存在したが、これらの作品研究は現在に至るまで少なく、アメリカの批評界では100年もの間事実上追放されていた。作品研究が遅れた主な理由は、これらの作品には物語の部分と作者の思索・創作メモが混在した断片的な記述が多い上に、複数の版が存在したため、編集作業の困難さを理由に放置されていたことが挙げられる。これらの作品が本格的に研究の対象となったのは、エドワード・H・デイヴィッドソンらが原本原稿を復元した『グリムショウ博士の秘密』(*Dr. Grimshawe's Secret: A Romance*, 1954)が出版され、更に1977年にはセンテナリ版全集の第12巻『アメリカの相続者原稿』(*The American Claimant Manuscripts*, 1977)と13巻『不老不死の霊薬原稿』(*The Elixir of Life Manuscripts*, 1977)に整備されて出版されてからである。

これまで申請者はホーソン作品における「語りの様式」を中心に、ホーソンのテキストをひとつの証言として歴史的パースペクティブに置いたとき、語りの向こうに浮かび上がる集団の記憶を探るべく作品研究を行ってきた。その結果、祖先が葬られた土地である墓地を含め、歴史が刻まれた土地/地所という物理的な空間がホーソン作品の根深いテーマであるという仮説を得た。イギリスからの移民がアメリカ人として共同体を築くために獲得された土地、および未来に繋ぐために相続される地所、そして死者を埋葬する儀式を含む追悼の社会システムを今一度点検するために、まだ研究が進んでいない晩年の作品である『アメリカの相続者原稿』と『不老不死の霊薬原稿』に収録された作品群を交えた分析は有用であるとの認識から、本研究をスタートさせた。

2. 研究の目的

本研究では、ホーソンの代表的な作品と晩年に取り組んだ未完の作品について、墓地を含めた土地空間の所有の問題、および死者の埋葬を中心とした慰撫と弔意儀礼が持つ意味について考察する。祖先や死者が眠る墓地という空間が、作品の中でどのような意味作用を持つのか、また土地空間を獲得する行為と死者を埋葬する行為が、アメリカ国家の歴史と記憶にどのように結びついているのかについて検証することを目的としている。『アメリカの相続者原稿』は、ジェームズ・ヒューイトソンが指摘したように、「アメリカ国家に対する考えを再評価するための作品である」⁽¹⁾と考えられる。リバプールのアメリカ領事館に在任中、ヨーロッパからの視点を得た晩年のホーソンが、ナショナル・ヒストリーに対する再検討に挑んだ作品として、『アメリカの相続者原稿』を中心に晩年の作品を分析する。その上で、埋葬や土地相続に関する他の初期短編や、長編に描かれた空間所有の問題が、最終的にはどこに繋がっているかについて検証を試みる。

3. 研究の方法

本研究では、内容別に以下の段階を経て研究を行った。

(1) 初期短編における埋葬についての研究：初期短編作品において、祖先、および共同体を埋葬する空間の描かれ方、それが未来へどのような洞察を投げかけていたのかを「ロジャー・マル

ヴィンの埋葬」(1832)、「アリス・ドーンの訴え」(1835)の短編から分析した。

(2) 『七破風の屋敷』(1851)についての研究：「死」をかくまう場所として機能させられている屋敷の内部において、祖先の複製とされるピンチョン判事の死体を銀板写真に写し撮ることの意味について分析した。その上で、19世紀アメリカの都市部における公衆衛生と田園墓地の問題について検証した。

(3) 死後出版の『アメリカの相続者原稿』と『不老不死の霊薬原稿』における分析：リバプールでの領事館での業務、およびヨーロッパ体験の中で生まれた「イギリスの爵位継承権に関する主張」というテーマの物語を、南北戦争前夜のアメリカに帰国したホーソンが「完成させることができなかった」根源的な理由について探った。同時期に出版された、イギリス旅行記『われらが故国』(Our Old Home, 1963)と当時の書簡や日誌から、大西洋横断的物語の構成およびホーソンが抱いていたイギリスへの思慕の描かれ方について分析し、未完の物語と照合することでホーソンが目指した最後の物語の方向性を辿った。

4. 研究成果

研究成果については、「研究方法」で示した内容に即して以下に記す。

(1) 初期短編における埋葬についての研究：

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(1832)はアメリカ独立以前のフレンチ・インディアン戦争を舞台とした18世紀に時代を設定し、家族の埋葬をし損ねたことが作品のテーマとなっている。フロイトの「喪とメランコリー」(1917)論を援用し、主人公ルーベンが義父の埋葬を怠ったことが、息子の死に引き継がれたように、埋葬の不履行は国家の未来が、過去の代償となる危険性を孕んでいるという結論に至った。報告として、“From Private Grief to Public Mourning: Roger Malvin's *Unaccomplished Burial*”(2016)の論文に記した。

また「アリス・ドーンの訴え」(1835)に関しては、本作品は魔女裁判が行われた1692年のセイラムという土地空間において、未だ果たされていない共同体としての埋葬および追悼について、ホーソンは「語り直し(retelling)」という行為を繰り返していたことを突き止めた。本作が一度遺棄された作品の一部を、内部テキストとして再利用したフレーム構造を持っており、果たされない過去の埋葬が二度・三度語りになって反復脅迫のように蘇るテキスト構造を持つことを明らかにした。報告として、“Twice-Told Narratives in ‘Alice Doane’s Appeal’: The Moment When the Form of Romance was Generated”(2018)を記した。

(2) 『七破風の屋敷』(1851)についての研究：

本作で用いられているダゲレオタイプの初期写真術は、銀板の上に像を焼き付けるという手法からネガを持たない唯一の写真という特性を持つ。ピンチョン判事の死体をダゲレオタイプで撮影したことで、密室の死は事件性のない自然死であることの証拠写真となった。またこの「動かぬ写真」は、ピンチョン判事と同じ顔を持つ、根源的悪事を働いた祖先(第一世代)の複製を、これ以上再生産させないという保障となる。よって過去の罪に対する償いが果たされぬまま、「死人の家」(II 183)⁽²⁾として不幸な世襲財産を子孫に引き継いできた屋敷の歴史は、本物語の結末で解消される。同時に主要登場人物が郊外の家に移ったという物語の最後を、19世紀のアメリカにおける公衆衛生および田園墓地の出現により、死体処理に関する都市の環境

問題に絡めて論証した。報告として、“Fixing the ‘Original’ in the Dead Men’s House: Thinking Security in *The House of the Seven Gables* through Daguerreotype”(2019)を記した。

(3) 死後出版の『アメリカの相続者原稿』と『不老不死の霊薬原稿』における分析：

イギリスのアメリカ領事館に就任するとき、ホーソーンは自身をイギリスから出立した祖先になぞらえ、今自分が200年以上の時を経て「戻ってきた」(XXI138)^③と自身の日誌で告白しているように、『アメリカの相続者原稿』はホーソーン自身の経験を素材として使っている。イギリス滞在を経たホーソーンは父祖たちの祖国と向き合い、この素材を使って大西洋横断的基盤を持った物語を書こうとするが、どれも失敗に終わる。しかし、そこには執筆上の苦悶やプロットについての度重なる構想が大量に挿入されており、「生の素材」を我われは「読む」ことができる。日誌に書かれたホーソーンの内声や友人たちに宛てた手紙から未完の物語を再読するとき、そこには南北戦争前夜のアメリカの行く末を案じるホーソーンの姿と同時に、アメリカの外に連帯(connection)を求め空想上の地図作成を行う作者の、隠された欲望を確認することができた。また『アメリカの相続者原稿』で果たされなかった土地空間の相続が、『不老不死の霊薬原稿』において完結しているという作品間の連携についても論じた。

本研究の内容は、国内での口頭発表「放棄された相続・放置されたロマンス American Claimant Manuscripts における時間と空間の移動」(2017)での内容をさらに発展させ、アメリカ・サンディエゴで開催された国際学会にて“‘Unspeakable yearning’ towards England: An imagined Inheritance in ‘The American Claimant’ Narratives”(2019)というタイトルで発表をした。現在は本発表を発展させた論文を書き上げ、投稿準備を整えている。

引用文献：

^①Hewitson, James. "A system 'too bare and meagre for human nature to love': America in The American Claimant Manuscripts," *Nathaniel Hawthorne Review* 35 No. 2, 2009., 26-43.

^② Hawthorne, Nathaniel. *The House of Seven Gables. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* II. Columbus, Ohio: Ohio State UP, 1965.

^③ Hawthorne, Nathaniel. *English Notebooks 1853-1856. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXI. Columbus, Ohio: Ohio State UP, 1997.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Mamiko KOMIYAMA	4. 巻 23
2. 論文標題 Fixing the “Original” in the Dead Men’s House: Thinking Security in The House of the Seven Gables through Daguerreotype	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成蹊英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mamiko KOMIYAMA	4. 巻 22
2. 論文標題 Twice-told Narratives in "Alice Doane's Appeal": The Moment When the Form of Romance was Generated	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 成蹊英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mamiko KOMIYAMA	4. 巻 50
2. 論文標題 From Private Grief to Public Mourning : Roger Malvin's Unaccomplished Burial	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『長野工業高等専門学校紀要』	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小宮山真美子
2. 発表標題 「放棄された相続・放置されたロマンス—The American Claimant Manuscriptsにおける時間と空間の移動」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Maniko KOMIYAMA
2. 発表標題 Unspeakable yearning ' towards England: An imagined Inheritance in "The American Claimant" Narratives
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----